

朝日 歌壇 俳壇



〈アオモリV〉 日高理恵子

◆小林貴子選

- 流水期酔狂といふ旅にあり (札幌市) 樋山ミチ子
- 俳人の俳はブルーヴさくら咲く (川越市) 渡邊 隆
- なんとなく雑な扱ひ官女難 (さいたま市) 與語幸之助
- 惜春や天衣無縫のマエストロ (新潟市) 江口 穂波
- 春めくや定家の記す超新屋 (東京都目黒区) 椿 泰文
- その昔絵踏の修羅場くへりぬけ (芦屋市) 三島久美子
- 黄砂起つ僧鑑真の故郷より (小金井市) 二瓶みち子
- 雷間草生き続けよと声のする (新潟市) 齋藤 達也
- あたたかや藁の匂ひの鹿せんべい (神戸市) 藤井 啓子
- 卒業のドラムロールをこの子にも (宇治市) 山田 修

【評】一句目、人からは「酔狂な」と言われるような旅を私も楽しみたい。二句目、ブルーヴとはいわゆる「ノリ」。俳句は定型詩ゆえ、ノリが大切。三句目、そんなつもりはなかったが扱いを改めよう。四句目は小澤征爾氏の面影が彷彿と。

◆長谷川權選

- アユタヤの躰大きな寝釈迦かな (三木市) 内田 幸子
- 千年の都に四年卒業す (加東市) 藤原 明
- 風吹けばどこも真白や飛花落花 (浜松市) 大平 悦子
- 雪解水大河となりて日本海 (長野市) 縣 展子
- つちふるや真つ赤に燃ゆる吹き硝子 (本巣市) 清水 宏晏
- 晴れわたる空の下なる余寒かな (浜松市) 久野 茂樹
- 杏子忌の花と星とが語りあふ (所沢市) 木村 佑
- 春蘭や妻が愛して石のそば (神奈川県栗田町) 山本けんえい
- 俳壇賞貰ひ卒業の春が来る (吹田市) 太田 昭
- あばよとて底すり抜けシャボン玉 (相州市) 木地 隆

【評】一席。タイの大地に横たわる寝釈迦。悠々たるアユタヤ朝。二席。京都の大学に四年。それも千年のひとつま。三席。桜吹雪の白い世界。至福の瞬間。十句目。「あばよ」とは律義なシャボン玉。どことなくフーテンの寅さんふう。

◆大串 章選

- 政界に鶴はつとぶき鳥鳴けり (さいたま市) 齋藤 紀子
- 引き揚げ者開墾の村黄砂降る (相馬市) 根岸 浩一
- 卒寿てふスタートライン風光る (敦賀市) 中井 一雄
- マチユビチュに登りて遊けり山眠る (横浜市) 廣瀬忠一郎
- 人生は旅逃水を追ふことし (長野市) 縣 展子
- 満州に父の青春鳥帰る (神戸市) 末永 拓男
- 進学を拒否して海女になりけり (栃木県壬生町) あらみひとし
- 悲しさも悔しさも捨て卒業す (長崎市) 下道 信雄
- 今年時く種を残して逝きにけり (静岡県河津町) 岩城 紀子
- 雛飾る能登の雛を思ひつ (普通寺市) 合田 豊

【評】第1句。政界の裏金問題。大物の鶴の一声も関係議員の亀の様な小声も国民は納得できない。第2句。太平洋戦争終結後、旧満州からの引き揚げ者たちが「開墾の村」を切り開いた。第3句。90歳がスタートラインとは！ 前向き思考に脱帽。

◆高山れおな選

- ひひなみなまぶたひとへにまばたかず (日立市) 加藤 宙
- 理容師に春の頭を注文す (東京都板橋区) 竹内宗一郎
- 愚禿親鸞大愚良寛万愚節 (松山市) 谷 茂男
- 手話の子の空に「さよなら」鳥雲に (茅ヶ崎市) 清水 吞舟
- ビル包むやはらかな雨納税期 (草津市) 佃 恵美子
- 雛の日に男紛れて散らし寿司 (名古屋市) 山田 邦博
- タテカンに俗字溢るる四月かな (千葉市) 團野 耕一
- 雛箱のちようちよ結びに雛納め (横須賀市) 前田あさ子
- 父みゆき母は春樹の春したつ (東京都練馬区) 吉竹 純
- 本当のバイちゃんとなりぬ雛あられ (さいたま市) 齋藤 紀子

【評】加藤さん。時間が止まったような世界。ヒイナ、ヒトエの頭も利いた調べの美しさを仮名書きで強調する。竹内さん。何とも大膽みな「春の頭」に一笑。

俳句時評 日々の味わい

阪西 敦子

俳人協会賞を受賞した句集『家族』(からんす堂)は千葉皓史の32年ぶりの第二句集。俳人協会新人賞を受賞した前作『郊外』(花神社)の後から、平成末年までの340句が収められている。

新人賞の受賞後、一俳句とは全く別の身上の都合で石田勝彦、綾部仁喜に師事した俳誌「泉」を退会、その後は細々と作句を続けたという。そのことがこの三十余年の隔たりを生む一方で、句集にゆற்றりした時間の流れをもたらして

いる。「春の虹こつんともの置かれたる」で見えるのは、ものを置くほどの音さえ響く春の虹の明るく静けさ。「大揺れのもののおもてを蟻の道」では、風も葉の揺れものともしない蟻の歩みを驚きとともに描く。「消しまはりたる春灯点けまはり」には、何か忙しくそれもうれしい春の浮きたちが宿る。

句集の中でたびたび現れるのが母だ。「いちにちを母老いたまふ春の雨」で、春の雨のひとつの中で老いを兆して

いゝ母の姿、(母の家に母ある秋の簾かな)での、秋になお残る簾の内にあるゆつりと進む母の時間、「雪解風そのとき母を失ひぬ」では、春へ向かう季節のうつろいの中での忽然とした喪失を描く。一句によつて日常の中にある時間を言い留めるような句群の中で、折々に見える母への視線がわずかに時代の変遷を表す。

過ぎゆく日々の味わいを、丹念に句とすることで、改めて見える姿がある。繰り返しのよう二度とはいはれず、(俳人)

歌壇でネット投稿を始めます 4月1日から歌壇への投稿がインターネットからできるようになります。朝日IDの登録(無料)が必要です。ネット投稿は1回の投稿につき1首、1週間に2首(投稿2回)以内。投稿や詳しい規定は短歌投稿フォーム(<http://t.asahi.com/wno4>)、またはQRコードから)をご覧ください。はがきの投稿規定は従来通りです。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」。一書投稿は不可。選者が添削する場合があります。